

宮大工 西岡常一の遺言

鬼に訊け

ドキュメンタリー映画

山崎佑次監督作品／2011年／カラー／88分

西岡家の床の間には今でも「不東」と書かれた軸が掛けられている。玄奘三蔵法師が経典を求めてインドに旅立、途中で危険な西方に行くのを諫められた時、「志を遂げるまで唐には帰らない」と自らに誓った言葉である。同時に法隆寺の昭和の大修理、薬師寺白鳳伽藍復興工事に携わった西岡常一が終生大事にした言葉でもある。

西岡常一、明治41年奈良県生まれ。木のいのちを生かし千年の建物を構築する。戦争による幾度かの応召を挟み、法輪寺三重塔、薬師寺金堂・西塔の再建を棟梁として手がけ、飛鳥時代から受け継がれていた寺院建築の技術を後世に伝え、「最後の宮大工」と称せられる。平成7年没。

技術の伝承、とりわけ宮大工の奥儀は、言葉ではなく体で覚えるもの、技術は盗むものといわれ長い時間をかけ、厳しい修練の後にごく一握りの者だけが獲得できるものである。しかし、西岡は宮大工の経験と技術、研ぎ澄まされた感覚を若い人たちに最後の力を振り絞り、残された時間と戦いながらあえて言葉で伝えようとしていた。西岡が言葉に託したものは、技術の取得の領域をはるかに超え、我々日本人の失ったものに対する警鐘と回帰ではなかったのではないか。西岡の言葉である「飛鳥に帰れ」とは、永遠なるものへの思いにほかならない。

「千年の檜には千年のいのちがあります。建てるからには建物のいのちを第一に考えなければならぬわけです。風雪に耐えて立つ—それが建築の本来の姿やないですか。木は大自然が育てたいのちです。千年も千五百年も山で生き続けてきた、そのいのちを建物に生かす。それがわたしら宮大工の務めです」と西岡は言う。木は鉄を凌駕する、速さと量だけを競う模倣だけの技術とは根本的に異なる日本人のいにしへの叡智、そして自然への洞察、千年先へのいのちを繋いでゆくという途方もない時間へ執念が、所縁ある人々へのインタビューから浮かび上がってくる…。

かいえんしゃ

海燕社の小さな映画会2018

後援：沖縄県那覇市



「鬼」と称せられ法隆寺の昭和の大修理
薬師寺の伽藍復興に一生を捧げた匠の生涯

ナレーター：石橋蓮司

出演：西岡常一・西岡太郎・石井浩司・速水浩・安田暎胤（薬師寺長老）

企画：小林三四郎／プロデューサー：植草信和・朴 炳陽

聞き手：青山茂（帝塚山短大名誉教授）・中山章（建築家）・山崎佑次

音楽：佐原一哉／撮影：多田修平／編集：今岡裕之／録音：平口聡

タイトル：上浦智宏

製作：©『鬼に訊け』製作委員会／配給：太秦／助成：文化芸術振興費補助金

後援：奈良テレビ放送株式会社 奈良新聞社／協力：彰国社



日時 2018年4月21日(土)

場所 沖縄県立博物館・美術館
博物館講座室(1F)

時間 18:00～(17:30開場) ※途中入場はできません。
19:45終了予定

料金 1,000円(要予約) ※先着順、定員に達し次第
締切らせていただきます。

電話 098-850-8485 (海燕社)

メール mail@kaiensha.jp